

3340 ハプニング発生：久楽 身柄拘束

パリ到着二日目、師走、12月中旬、場所は、サン・ラザール駅舎内。
拠点のホテルから徒歩15分、朝か夜、毎日一度は定点観察の場所として散策する場所。
パリを去る人、パリを訪ねる人、久楽には勉強になる場所。

パリには多くの始発駅（終着駅）がある。東駅や西駅、リヨン駅ほか、今回は複数回訪ねた。

サン・ラザール駅の車線は、30近く、地下3階、広大な駅である。

列車の行き先を見ると、イルドフランスやシェルブールなどの行き先が目についた。

映画「シェルブールの雨傘」。遠い昔、映画も鑑賞。訪ねた12月のパリは毎日霧雨が続いた。

映画ソフィアローレンの「ひまわり」。ストラスブルグの駅舎が思い浮かぶ。

駅には、夢とロマン、別れや出会いのドラマが生まれる。下記は、ドイツ・ミュンヘン。



今は、師走のパリ、行き交う雑踏は半端でない。次々と到着や発車が繰り返される。

今年のパリは、事件もあって、やっと警戒レベルが引き下げられた状況、
警備関係者は常に臨戦態勢、場所にもよるが機関銃を持ったチームとすれ違うことも度々。

体験もあり、状況も把握、カメラを首から、そうしたスタイルの観光客も目についた。

諸般の状況から、カメラ撮影の対象は、特に注意していた。

突然、背丈が2メートルもある黒人が、うしろで、トランシーバーで… 大声…

仲間が集まってきた。私のことを話しているらしい。撮影した画像に問題があるのかと、ふと

フィルムカメラでなく、デジタルカメラ、画像を見せたが納得してくれない。

連行である。冷静だった。肩には駅の関係者らしいマークも。責任者もフランス語だけ。

どう考えても、連行される理由が見つからない。
人も集まってくる。過剰反応なのだが、神経が過敏になっているのだろう。落ち着いていた。
ここはフランス、法治国家。信頼している。某国ではそうでなかった。

そこかしこに、監視カメラもあった。やましいことはない。証明されるだろう。
突然のハプニング。黒人は興奮していたが、私自身は、落ち着きたいので対処できた。
駅舎の端から端まで、15分程度だったが、時間を長く感じた。

SNCF 関係者か、軍隊かわからないが、機関銃を携帯したチームが来てくれた。
「英語が話せるか」と、英語で聞かれた。そして、画像のことだと思うがと、見てもらった。
何が悪いのかわからなかった。言葉が通じたので、その場で解放。

冒頭に、いい体験をさせてもらった。郷に入れば郷に従う。梨花の下に冠を正さず。
気合が入ったのは言うまでもない。
しかし、パリの状況は、あまりいいとは思えない。

20 区、すべて訪ねたのだから、厳しい目撃や体験。今回のフランス訪問は、大成功だった。
1ヶ月の滞在、早く帰国と、ふと思った瞬間もあったが、前傾姿勢で対処。
そうした体験の後、セヌ河の流れや歴史遺産、オルセー、ルーブル、ピカソ鑑賞ほか、

マドレーヌ寺院でのビバルディ新年コンサート他、
経営者時代、関係した会社周辺も懐かしく散策。ひととき、若い頃を思い起こす時間だった。
人生いろいろ。今ある状況に感謝。今後も、できることを頑張りたい。

年齢という厳しい領域に突入。人生第4四半期。思い通りにならない魔物が追いかけてくる。
帰国後も、時差の解消や、いつものように健康最優先と寒空の中をママチャリで。
夕景のあかね雲との出会い。町衆の清掃やゴミ拾いを目撃。
いつまでも美しい街であってほしい。今回のハプニングにも動じなかった久業がいる。
自分の役割は？ これまでと違った収穫、いろいろなパリの出会いを次に。